

第2部 トークショー／講演

「いじめを乗り越えた子どもの明日はすばらしい！」

志茂田 景樹 (よい子に読み聞かせ隊隊長、作家)

志茂田景樹でございます。昨日、長崎入りしましたけれども、とても暖かかったですね。「長崎は今日も暖かかった」です。

今日は、普段より地味な格好をして参りました。いじめられないかと危惧しまして。いじめるといのは、弱い者、変な者、そして訳が分からない者、大体そういう感じだといじめられるんですね。僕もだから、変でしょ？普通で感覚で見るとこういう格好はね。だから、随分いじめられてきたんですよ。その源流を辿ると、ずっと昔の子どもの時になりますけれども。東京に表参道（渋谷区）というところがあります。若者から、そして意外と30代、40代、50代ぐらいの人たちも含めて、流行の先端に行く人たちが歩いている街なんですけれどもね。その表参道に30分も立っていると、僕のように髪の毛を二色、三色に染めている若い人が結構通ります。でも、道行く人たちは、別にそれをいぶかしい目で見たり、え？なんだろうこれは、というような表情になりません。全く普通にすれ違ってきます。でも、24～5年前はそうではなかったんですよ。



志茂田景樹さん

僕がこういう格好になったのは、実は、作家になって直木賞を受賞¹⁰して、これからはサラリーマンの人よりも自分を解放させようと思えばいくらでもできる状態じゃないかと、そういうふう思ったんです。なぜそう思ったのか。人間って生まれた時、無垢ですよ。真っ白です。でも成長していくに従って、いろいろな知恵を付け知識を付けて、たくましくなっていきます。ある意味で、悪い知恵も付けていくかもしれません。世の中というのは、きれい事ばかりじゃ生きていけないから。無垢だった、真っ白だったところに、次々といろいろなものを塗っていくわけです。

でも、僕、作家になってから思いました。自分は心に随分と不要なお札を貼り付けてしまったのではないのか。心が重かったんですよ。なんか、自分自身が息苦しい。物を書いて生きていけるという自分の目標は（作家になることで）達成しました。でも達成した時に思ったことは、なんと自分の心は重いだろうか。不要なお札を貼り付けている。例えば、虚飾、虚栄¹¹の札。例えば、人を陥れたり人の足を引っ張ったりする、そういうような札。あるいは、自分を偽る欺瞞¹²の札。いろいろな不要なお札を貼り付けている。それで何だか息苦しい。そういう不要なお札を一枚でも二枚でもいいから剥がしていきたいと、そう思ったんです。

ちょうどその頃に、ニューヨークに数か月、仕事で滞在していた知人が日本に戻って参りました。アパレル業界の女性の知人ですね。そしてその知人と会った時、僕に小さな包みをくれました。これ、あなただったら似合うかもしれませんよ、と。その時に、その包みを開けてみれば中身が何かすぐに分かったのですが、お互いにその後用事があったので、いずれゆっくり会おうなという事で、数分の立ち話だけで別れました。そして僕は家に戻ってみてその包みを開けました。そうしたら、マリリン・モンローの顔が足首から太腿までプリントされたタイツが2足入っていたんですよ。当時、ニューヨークの若い女性たちの間で流行っていたらしいんです。24～5年前の僕は、そのタイツを広げて、

10 1980（昭和55）年、志茂田氏が40歳の時に「黄色い牙」で第83回直木賞受賞。

11 きょえい：外見だけを飾りたて、実質が伴わないこと。みえ。

12 ぎまん：人をあざむくこと。だますこと。

「おお、これはすばらしいタイツだ、すぐに履くぞ」と、そういう意識ではありませんでした。「えー、なんでこんな物くれたんだろう」と思ったんですね。第一、これは男が履くものではないじゃないかと。そういう意識でした。今の僕とは違ひましてね。ですから、それを放り出しておきました。

でも、何かの時にもう一度、そのタイツを手にとって、しげしげと見たんですよ。するとなんとなく履きたくなかった。履いて鏡を見ると、結構かっこいいじゃないかと思ったんですね。それで、1本のジーンズを裁ちばさみで短く切りまして、そしてそのタイツの上から履きました。これ（今日穿いているオレンジ色のズボン）もそうですよ、長いものを切ってあります、暖かい陽気の頃だったので、上には気に入っていたTシャツを着ました。そうしたら、その格好で外を歩きたくなったんですね。ちょうどその頃、麻布十番（東京・港区）に事務所を開いたばかりの頃で、たまたま事務所に居たんです。そして、その格好で外に出ました。すると、すれ違う人々がぎょっとした表情になったり、なんだこいつはといった感じの白い目を向けてきました。24～5年前はそういう時代だったんですね。

その時、僕は3人連れのサラリーマンとすれ違ひました。40代半ばぐらいの男性です。当時は上着のスーツの襟の部分にバッジを着けているサラリーマンが多かったのですが、そのバッジを見ると、仮名にしておきますけれども、〇〇物産のバッジでした。皆40代半ばということは、当時の〇〇物産では同期の課長といったところですね。彼らは、僕とすれ違う時、3人とも一瞬表情をゆがめました。でも、なんでもなかったようにすれ違ひたんですね。紳士ですから。その時、僕は、あの3人はきっと立ち止まって僕を見ているぞと思ったので、6～7歩歩いてさっと振り返りました。すると、案の定3人は立ち止まって、ひそひそ話をしているんですね。それでそのうちの一人がこういうふうに入差し指を僕に向けていた。後ろ指を指すって言葉がありますね。正にこれが後ろ指を指す、です。さすがの僕も、ちょっと落ち込みました。事務所に戻って普通の格好に着替えようかと思ひましたよ。でももう事務所から1km以上も歩いて来ていました。進むも地獄、引くも地獄、ならば進んでやろうじゃないかと開き直ったんですね。

その開き直ったことで、その代償として、僕の心にいっぱい貼り付いていた余計な札の2～3枚が剥がれ落ちたと思ひます。自分を偽らず、自分を出せばいいじゃないかと。ブランドとかなんとかそんなものにこだわらず、自分が身に着きたい物を身に着ければいいじゃないかと。飾らない自分になる、そういう札を剥がしたのかなあと。知らない人から見れば、逆にあいつは飾り立てていると見えたでしょう。心の不要な札を少しでも剥がした結果が、1枚でも2枚でも剥がした結果が、僕にとっては、こういう格好になっていった。つまり、自分を解放したいという引き金になったんですね。そのタイツが。でも、その引き金になるためにはその前に、僕自身が、今の自分をもっと解放させたい、自分自身を出して生きていきたいと、そういう思ひがあったからだと思うんです。

僕の父は国鉄職員でした。その関係であちこちの官舎を転々とししました。父は、僕が小学校を卒業する年の春に退職しました。そして、隣町に家を建てました。ですから僕は、中学生の時からその町に入りました。誰一人、知っている者はいませんでした。でもほかのクラスメートたちは、いくつかの小学校から来ていますけれども、それぞれ顔見知りの、小学校時代からの友達が、同じクラスにも、ほかのクラスにもいました。僕のクラスにたまたま、同じ小学校から来た、ちょっと悪ガキふうの3～4人のグループがいたんですね。入学式が終わって2～3日目のことです。4月で割と暖かかった日だと思ひます。お昼休みに僕は、当時の中学生がよく着ていた学童服というんですかね、学生服と似ている襟のついたやつがあったのですが、それを脱いだんです。そうしたら、僕がその下に着ていたシャツを見て、その3～4人の悪ガキグループが、「なんだなんだお前、お前なんでそんなもの着ているんだ」と、僕のところに駆け寄って来ました。僕には姉が二人いました。すぐ上の姉と8歳も年が離れていません。昭和27（1952）年に僕は中学1年生です。この頃は、日本が朝鮮戦争¹³の特需で少し工業が活発化

13 1950（昭和25）年6月～1953（昭和28）年7月に、成立したばかりの大韓民国（韓国）と朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の間で、朝鮮半島の主権を巡り、北朝鮮が国境を越えて侵攻したことによって勃発した国際紛争。

してきて、これから上昇していこうっていう時代でした。でも、まだまだ生活は貧しかったです。庶民の生活と言いますかね。僕の母は、二人の姉たちのお古のブラウスを僕用のシャツに仕立て直してくれたんです。ですから、学童服を脱ぐと、花柄がこういうふうについているんですよ。ただの白いシャツじゃなくて、元々はブラウスですから。それで、そのシャツを見つけた悪ガキグループが、なんだお前と駆け寄って来て、僕の頭を小突いたということなんです。それで済めばよかったんですが。当時の僕は、身体が小さくて、クラスでは前から2番目でした。そして、腺病質¹⁴で虚弱だったんですね。しかも、ただ身体が小さいだけではなくて、どこか身体が不自然な感じの虚弱児という、そういう印象だったと思います。その週の土曜日に学校から帰ると、母から「買い忘れた物があるから買いに行ってくる？」と言いました。当時、土曜日は会社も学校も半ドンだったんです。「おからを買ってきてほしい」と言われました。卯の花料理を作るためのおからを。それで僕、買いに行ったんですよ。一番近い商店街では、豆腐屋さんと魚屋さんが隣り合わせだったんです。僕は慌てていたこともあって、隣の魚屋の方に飛び込んで、「おから下さい」と言ったんですね。そうしたら、魚屋のおばさんが、「うちは魚屋だよ、豆腐屋は隣だよ」と言いました。たまたまその時に、クラスの悪ガキグループが通り掛かって、僕が間違えて魚屋に入って、おから下さいって言っていた時の一部始終を見ていたんですね。

日曜日を挟んで次の月曜日に学校へ行きました。すると、その悪ガキグループが、おから、おから、おから、おからとはやし立てました。その連中がはやし立てるものですから、クラスのほかの者も一緒になってはやし立てました。しかも、ただはやし立てただけではないんですね。腕を引っ張って、自分のグループのところまで連れて行って、小突いたり、膝蹴りしてきたんです。僕を取り囲んで、おから、おからとからかいながら。でも、今のいじめと違うのは、蹴られたり小突かれたりした僕が、手加減しているなど分かる、そういう小突き方、蹴り方だったんですよ。

昔、例えば、八百屋さんで、人参やジャガイモを買うと、今みたいに大きさや形がそろっていませんでした。なんだかチビっこいのもあったし、丸なくて変な形のジャガイモもありました。人参だって、今はきれいに洗ってあって、きれいな色をしていて、形もそろっているじゃないですか。でも当時は、八百屋さん行くと人参が並べてはあるんですけども、形も大きさも不ぞろいでした。しかも、こんなふうに曲がっているのもあった。でも、食べてみりゃ皆同じなんですね。中身は変わらんのです。だから、ちょっとなんか不格好だけど、まあいいだろうということで店に並べていたんです。ところが今は、大きさや形がそろってないとはねてしまいますよね。これは、今のいじめにちょっと似ているんですよ。

昔は手加減したいじめでした。だからいじめられてつらかったけれども、もともと少し貧弱であっても、我慢して勉強できた。今のいじめとちょっと違うところがあるんですね。ある意味では、歯止めが掛からない。中身は同じ味でちゃんと食べられるのに蹴り飛ばしてはねてしまう。そういういじめから、陰湿な結果が、悪くすれば死に至るような結果が生まれるのではないかなと、僕はちょっと違う視点から思ったことがあります。

話を元に戻します。僕は、ほかのクラスの子たちからも、おから、おからとからかわれるようになりました。校庭の裏門から歩いて30秒くらいのところに、小さな文房具屋さんがあったのですが、そこに消しゴムを無くしたか、忘れたかしたので買いに行くために校庭を横切っていたら、2階の窓から、おから、おからと何人かがはやし立てました。するとたちまち、学校の全ての窓に鈴なりになって、おから、おからの大合唱が起きました。本当に嫌だったですね。学校に行くのは本当に嫌でした。でも、嫌だからと言って、当時は学校に行くのをやめようっていうそういう意識を持つ子どもはいなかったんですね。不登校なんて言葉もありませんでした。

ただ、僕のクラスにも長期欠席している生徒が二人いました。一人は結核で療養所に長期入院していました。当時は国民病と言われるぐらい結核患者が多かったんですね。そして、療養生活も長かつ

14 せんびょうしつ：体格が小さく、貧血や湿疹などを起しやすい虚弱で神経質な子どもの体質。現在ではほとんど用いられない。

たんですね。1年あるいは2年ぐらい遅れて復学してっていう子どももいました。でも、当時は、病気ではなく、別の理由で長期欠席している子どもの方が多かったんですね。何が理由だと思いますか。家の仕事の手伝い、家事の手伝いなんですよ。

僕のクラスのもう一人の長期欠席者は、お父さんが八百屋をやっていたんです。店舗はなくて、リアカーに野菜を載せて引き売りをしていたんです。彼は、お父さんが引くリアカーの後ろを押していたんです。そして、リアカーを押すことだけではなく、例えば、どこかの社宅に入って、お父さんがメガホンで、八百屋で〜すと大声を出すと、みんな主婦たちが集まって来るでしょ。そしてあれこれ手にとっていろいろ買うのですが、お父さん一人では対応しきれないんですよ。お釣りの計算もすっかりやらなきゃいけないんで。それで、彼が買ってもらった野菜を新聞紙で包んで渡したりするので、結構忙しいんです。このように、家が貧しくて、家の手伝いをするために学校を長期欠席していた子どもが多く見られた時代でした。

今は、学校でいじめられた、嫌になった、じゃ行くのやめようかな、とある意味では、今の不登校の子どもたちはとても幸せかもしれません。こんなこと言うと、誤解されるかもしれないけど、最後まで話を聞いてください。

僕が中学生の時は、先ほどお話したような状況でした。ある時、昼休みに校庭を横切ることになったんです。学校の外に出なくてはならない用事があったんでしょうね。そうしたらまた、案の定、窓から、おから、おからの大合唱が始まりました。当時の僕は、身体が小さくて虚弱児だったと言いました。だから、駆ける時に変な手の振り方をするんですね。それで、早く校舎に入りたくて駆け出したら、おから、おからという大合唱がもっと強くなったんです。その時、僕は、「どうせ、おから、おからと言われるんなら、もっと言われてやれ」というふうに、どこかで開き直ったのかもしれない。もともと、普通に走っても変な手の振り方になるのに、わざとうんと変な手の振り方をして駆け出したら、大爆笑が起こったんですよ。さらに、その大爆笑が起こる前に、僕に対するはやし立ての言葉が「おから」から「おけら¹⁵」に変わったんです。最初は、数人の悪ガキグループが変えたんだと思いますが、それがどんどん伝染して、「おから」がたちまち「おけら」になったんです。僕が変な手の振り方で走っている姿からケラという虫を連想したんでしょうね。一般的におけらと呼ばれていますけれども、もぐらみたいに前足だけが太い虫です。捕まえるとその太い前足をすごく変なふうに勢いよく振るんですね。学校の2階から見ると、僕が駆ける姿がそのおけらを連想させたんだと思います。数人が言い始めたおけらコールが、あつという間に伝染し、大爆笑が起きた。そして僕は、どうせはやし立てられるのならならば、開き直ってやれというような気持ちになったのかもしれない。わざともおかしく手を振った時に、さらに大爆笑が起きたんです。でも、その大爆笑を契機として、悪ガキグループの僕を見る目がちょっと変わったんですね。からかう表情や笑い顔はそのままだったのですが、それにどこか親近感を持ったような感じで僕に接するようになりました。彼らが、お前ちょっと来いよって言うので、側に近寄って行くと、変な雑誌のグラビアを見せる。当時の大人がひそかに読んでいた、いわゆるエロ雑誌というんでしょうか、そういうもののグラビアを僕に見せて、その反応を見て喜ぶ。それを機に、小突かれたり蹴られたりすることは、ぴたっと止んだんですね。卒業するまで、おけらというあだ名は僕に付いて回りました。まだおからなら良かったな、なんていうふうに思いましたけれどもね。

後から振り返ってみると、僕自身は自分がいじめられたことを受け入れて開き直ったことで、乗り越えることができたのかななんて思っております。でもこれは、今とは時代が違う、あの時代における僕の体験です。先ほども言いましたが、数人に囲まれて頭を小突かれたり、膝蹴りされたりしたけれども、どこかで手加減していた。つまり、あの時代の子供たちは、学校から帰ってもガキ大将グループの中に混じって遊んでいた。年齢はまちまちです。ガキ大将っていうのはやっぱり、グループ

15 ケラ:バツ目・キリギリス亜目・コオロギ上科・ケラ科に分類される昆虫の総称。地下にトンネルを作って住居とし、採餌行動も地中で行う。日本では、「おけら」という俗称で呼ばれることが多い。

の全体を見ているんですね。喧嘩が始まっても黙って見ているんですよ。ずっと見ているかというところじゃない。どっちかが確実に劣勢でやられ放題で、このまま見ていたら怪我するぞというところで、やめろよ、そこで、と割って入るんですね。

子どもの世界にもそういう歯止めの機構があったんですよ。大人たちも、たとえ隣の子であろうが、官舎に入っていて上役の子であろうが、悪いことをやっているのを見たら、何してるんだ、こら、と、すぐ止めた時代だったんですよ。そういう中で、子どもたちは無意識のうちにルールを身に付けていった。だから、歯止めが掛かるんですね。今はそうではないんです。

今から17年ほど前のことになりますけれども、フリースクール¹⁶があっちでもこっちでも、まるで雨後の竹の子が地表からすーっと芽を出すようにたくさんできました。そのうちの一つから、うちのフリースクールで特別講師をやってくれないかというオファーがありました。90分の枠で2コマ、月に1回でいいから、授業を行ってほしいという依頼でした。授業の内容はお任せしますということで。そして僕は、作家としてフリースクールに興味がありましたので、引き受けました。月に1回であればいいかなということで。

その年の4月、第1回目の授業に行きました。そこには12～3人の生徒が居ました。授業の内容はなんでもよいと言われていました。国語の話でも、文学の話でも、その時社会で起きているあるいは注目されている事柄についてでもよいということだったのです。その時は、スポーツの話題なんかも含めて、その時に世間の注目を浴びていたものについて話をし、それに関連した文学作品に話題を移したりして、その後作品をコピーしたものを渡して、僕がそれを読んだり、生徒に順番に朗読してもらったりといったような授業でした。

授業の一つの枠が90分ぶっ続けでやりますから、時間が経つにしたがい、みんな心を開いてくれました。でも一人だけ、どうしても心を開かない男子生徒がいました。視線が合うとすっと背けてしまう。ここを朗読してくれよというつもりで、指を差すとうつむいてしまう。こちらが話しかけても一言も回答がないままに、4月の授業は終わりました。

5月の授業の時です。僕の担当する授業を行う教室は2階にありました。1階のトイレに入って、その階段を上って2階へ行こうとしたら、僕を追い抜いていった生徒がいたんですね。追い抜かれ様に見たら、僕にとって、いいなあと思うピアスを、その生徒が耳に付けていたんです。僕は、耳にピアスの穴は開けていませんけど、ピアスに近い小ぶりのイヤリングは時々付けていました。生徒が付けていたのは、本物のプラチナではないでしょうけど、プラチナ風の素材で、星をすごくうまくあしらったデザインでした。本当にいいなあと思ったので、そのピアスいいじゃないかと、追い抜かれ様に言ったんですね。すると、その生徒がニコッと笑ったんですね。1か月の間、とうとう心を開くことなく無表情のままに終わった彼でした。でも、ニコッと笑っただけです。結局、その日の授業の中でも、彼は心を開いてくれませんでした。

6月の授業の時です。このフリースクールでは、情操教育というのを重視していたこともあって、外のカラオケルームに行ったんですね。十数人が入れる部屋を貸し切ってあるので、そこで、生徒と一緒にカラオケをやってくださいという学校側の要望でした。生徒をカラオケに連れて行って、そこで90分歌ってればいいということですから、僕はこれは楽でいいなあと思ひまして、喜んで、生徒を引き連れて行きました。そして、皆着席して、飲み物が配られて、もちろんアルコールじゃないですよ、飲み物が配られた時に、僕は誰か先陣切って歌う人はいないかな、いなきゃ僕が歌うよ、僕すごい音痴だけどねと、GLAY（グレイ）¹⁷の曲でもいいじゃないかと、そう言ったんですね。GLAYは当時、

16 日本においては、不登校の子どもの受け皿として、その学習権の保障や安心してすごせる居場所を提供する施設や通信制高校での学習をサポートするサポート校などを指す。不登校の子どもの対象とした、既存の学校とは異なる機関、施設が、フリースクールと総称される。

17 日本のロックバンド。1994（平成6）年メジャーデビュー。「グロリアス」「BELOVED」「口唇」「HOWEVER」などのヒット曲がある。

人気急上昇中で、若者の間で人気が沸騰していた、あのGLAYです。GLAYでもいいじゃないかと言った時に、2か月間、とうとう心を開くことのなかった彼が、僕が歌いますと言って、立ち上がったんですね。その時、僕は内心で、えーっと思ったんですけど、歌ってくれるの、じゃ頼むよと言って、彼に初っ端に歌ってもらいました。彼は、すごく心地良い感じで、切々と歌っていました。歌い終わると、もう1曲歌っていいですかって言うんですね。ああいいよ、どんどん歌ってと僕は言いました。すると、彼は、もう一曲、GLAYの曲を歌いました。また心地良さそうに、感情を込めて歌ったんです。うーん2曲も歌ってくれたよと、僕は内心びっくりしていたんですけども、歌い終わったら、またもう1曲だけいいですかって言うんですね。ああいいよ、と答えました。とうとう3曲、GLAYの曲を彼は歌いました。それが、彼が僕に初めて心を開いてくれた時だったんですね。

それからの数か月間、彼は本当に変わっていきました。そのフリースクールは、ある学校に併設されていました。ですから、その学校と一緒に文化祭を行うんですね。そして10月の文化祭の時、フリースクールの生徒だけのブースを出したり、フリースクール独自の企画をやりました。例の彼がリーダーになってやったんですね。

僕が1年間の特別講師の契約が終わってそこを去るまでの間に、彼がどういうことで不登校になって、どういうことでフリースクールに来たのかが、彼の家庭の状況も含めて、はっきりと分かりました。でもそれは、僕が彼から聞き出したわけではないんです。僕は、そのフリースクールを去るまでの間に、彼自身が問はず語りに言ったことを、僕の胸の中で集大成しただけです。彼のお父さんは、ある学校の校長をしていました。彼のお母さんも元教育者でしたが、彼が生まれた時に、育児に専念するために、教壇から去りました。彼のお父さんは、日本では最高学府と言われている大学の出身でした。彼が幼稚園に通っていた時から、お父さんはこう言っていたそうです。お前はお父さんが出た大学に入ってくれるよな、楽しみにしているぞ、と。幼稚園の時にそんなこと言われたって、別に重圧は感じないでしょう。大学入学まで、はるか彼方ですからね。小学校の時もさほど重圧には感じないですね。ただ、そのお父さんが、本当に口癖のように彼に対してそう言い続けてきたことを念頭に置いて、後の話を聞いてください。彼は学校の成績はよかったんです。高校も屈指の進学校の一つに入りました。それでお父さんは喜んじゃってね。これでもうお前はお父さんが出た大学に入学できるよな、頼んだよ、よかったな、なんていうような言い方がすごくリアルな感じになって、期待度が100%で言うと98%ぐらいな、そんな言い方になってしまったんですね。この頃の彼は、お父さんのその口癖にとっても強い重圧を感じていました。実は、彼は中学3年の頃に、自分が将来進みたい道、ある志望を胸に抱いていたんですね。その時それをお父さんやお母さんに伝えていれば、これから話すようなことは起きなかったのではないかと思います。その時、お父さんが、お母さんが、彼の話に耳を傾けて、彼の希望を認めていたら、その後の悲惨なことは起きなかったと思います。

彼は、高校1年の1学期は無事に終えたのですが、夏休みが明けて2学期になって間もなく不登校になりました。学校でいじめを受けたんですね。彼はすごく無口な人間です。そして、話し掛けられても小さくうなずくだけの時があったんですね。それで、周囲から誤解を受けるところがあったんでしょうね。それと、周囲の誰もが、彼のお父さんが学校の校長で、お母さんも学校の先生だったということも知っていた。そして、休み時間や昼休みになると、ほかの生徒が見たこともないようなこんな大判の新聞紙ぐらいの大きさの本を広げて見たりしている。実は彼は中学3年の頃からデザイナー志望だったのですが、それに関連する書物を区の図書館で借りて、学校には無いから、教室で広げて見ていたんですね。そんないろいろなことが、彼がいじめを受ける原因になったのかもしれない。

ある朝、彼がなかなか起き出してこないもので、お母さんが彼の部屋に行って毛布を剥いで、起きなきゃ駄目じゃないの、学校に遅刻するわよと急かした。彼は渋々起きて、だらだらと朝食を取って、普段だったら家を出る時間になってもトイレに入ってなかなか出てこない。お母さんは焦って、トイレのドアをどンドンと叩きながら、何をしているのよ、遅刻するわよ、といううやうやと出てくる。そうしてトイレから出てきて、かばんを提げて、うちは出て行きました。でも学校へ行ったわけではなかったんですね。公園に行ったり、図書館に行ったり、いろいろなところで時間をつぶして夕方家に帰っ

て来る。翌日も、かばんを提げて家を出て行きました。でも学校には行っていなかった。

二日目に担任の先生から電話があって、お母さんは彼が不登校である事実を知ったんですね。お母さんは驚いて、彼を問い詰めて、行かなきゃ駄目よと、学校に行くことを約束させたんですけども、三日目も四日目も行かなかった。はじめは、お母さんはお父さんに彼の不登校のことを言わなかったんですね。でも、一週間経っても、不登校が続いた。そこで、いつまでも隠しておけないということで、お父さんにそのことを伝えたんです。それを聞いたお父さんは、がく然としたんですね。自分が出た大学に入学してくれるものと思っていましたから。そして彼が勉強すれば、それは十分に可能だと樂觀視して、そのつもりになっていましたから。激情に駆られたお父さんは、生まれて初めて、彼をぶん殴ってしまったんですね。でもそれによって、彼の逆ギレを呼んで、家庭内暴力が始まったんです。その家庭内暴力がどんなに凄まじいものだったかは、今日のテーマとは違いますので、詳細はお話ししません。でも、なぜ彼の家庭内暴力がなくなっていったのかについては話してみたいと思います。

その後、お父さんの心からも、お母さんの心からも、お父さんが出た大学に彼が入るという期待が全くゼロになりました。全くゼロになれば、本人にもよく伝わります。その時に彼の家庭内暴力が止みました。そして彼は、自らフリースクールの門を叩いて、入学願書を取ってきて、ここへ行っていいかなと、お父さんとお母さんに言ったんですね。当時は、子どもが自分でフリースクールに行って、自ら入学の意志を示すということはほとんど無かったんです。保護者が行って、こういうところがあるから行きましょねということに通う子どもたちがほとんどでした。

ちなみに、当時のフリースクールの生徒全員が100%不登校の生徒たちだと想定してください。ごくまれに違うケースがありますけれども。なぜ不登校になったのか。当時は、その内の約3分の2がいじめが原因でした。残りの3分の1は情緒不安定が原因でした。現在の状況は、僕は正確な統計上の数値は知らないんですけども、よい子に読み聞かせ隊の活動や中学や高校などに行った時などに聞いた話、知った事実などから判断すると、いじめがまだ多いかもしれません、心のリズムを崩して不登校になる子どもたちが増えているというのが実感です。そのくらいの割合かは分かりません。これは僕が思っている、実感していることです。

話を元に戻します。そういうわけで彼は、僕に心を開いた。いじめを受けて、学校から帰ってきた時から、そして不登校を始めてから、彼が自室に入って束の間でも心が解放できるのは、GLAYの曲を聴いていた時だったんですね。だからカラオケに行った時に、僕が「GLAYでもいいじゃないか」と言った時に、ぱっと反応したんです。その後、彼はデザイン関係の学校に行って、今はデザインの仕事をやっております。そのうち、どこかで彼の名前を聞くこともあるんじゃないかなと期待しております。最近は年賀状のやり取りもなくなりましたけれども、そんなものない方が、彼がぐーんと成長している時だと思いますので、僕は全然心配していませんけどね。

彼が不登校を始めた時代というものを考えてみましょうか。日本の家庭の多くが、子どもたちに部屋を与えた時代です。子どもたちは、自分の部屋という城を持ちました。子どもたちには意外と親には心配掛けまいという意識があるんですね。学校でいじめが始まって、嫌だ嫌だ、つらいつらい、そう思っても帰ってくる時は、ただいまと元気よく帰ってきます。そして自分の部屋にすぐ入ってしまうんですね。親は子どもが自室に入ってどんな顔しているかは分かりません。あるいは先ほどお話ししたフリースクールの彼がGLAYで救われたように、何かで心を癒やしているかもしれませんが、周囲の人にはそれは分かりません。朝も、行ってきますと元気に学校へ出掛けて行きます。親は学校で子どもがどういう目に遭っているのかを知りません。その間に今はいじめがどんどんエスカレートしていきます。気が付いた時は深刻な状態になっているんですね。そういうパターンが多いようです。

僕らが子どもの頃はどのような状況だったでしょう。商店街から続いた住宅街なんかの道を歩いていると、当時はよく、お父さんの怒鳴り声が聞こえました。怒鳴り声だけじゃありません。卓袱台¹⁸をひっ

18 ちゃぶだい：日本において、和室などで床に座って用いる、短い脚のついた木製の食卓。折り畳み式のものも多く、形は正方形・長方形・円形と様々である。明治時代以降に使われるようになり、1920年代後半に全国的に普及したが、1960年ころから椅子とセットになったダイニングテーブルが普及し始め、卓袱台の利用家庭は減少していった。

くり返して、がらがらがっちゃんという食器が割れる音も聞こえてきました。こんなもの食えるかっ！なんていう声も聞こえてきました。何かで腹を立てて卓袱台をひっくり返したんでしょうね。でもそういうお父さんが、子どもの変化をいち早く見付けたんですよ。お前、この頃、顔色よくないな、学校で何かあったんだろう、というように。お父さんの勘は鋭いです。なんかあったんだろう、言えよ、言えよって言うから、子どもも実は……ということと話す。まだまだいじめと言っても、5段階だったら1ステージの段階です。それで、お父さんは、それじゃ俺が学校に行って先生に言ってやるといふうに、そんな感じになったんですね。では、お父さんが学校へ行ったかということ、実際には最初はお母さんが行ってやんわりと言ったのかもしれませんが。いずれにしても、今よりも当時の先生の方が、対応がよかったような気がいたします。モンスターペアレント¹⁹なんていませんもの。僕が小学生の時には、いじめられても意外と泣くことはなかったんですけども、普段いじめられてないのに、けんかで負けるとワーワー泣いてそのまま家へ帰っちゃう同級生がいたんですよ。すると、お母さんがその子の手を引っ張ってきて、担任の先生に、ぺこぺこ頭を下げてお詫びしていました。今は逆でしょ？何かあると、うちの子がこんな目に遭っているということで学校に乗り込んでくる。学校はどう責任を取ってくれるんだといったような話になるからややこしくなって、問題解決もなかなかできない。教育委員会がどうの、なんて、ややこしいことばかりになってしまって、時間ばかりが掛かって、ちゃんとした対策も進まずに、問題を複雑にして、結果的には大きな事件にしてしまうこともあります。学校の方も当時のように良い意味で世間慣れしている先生が少なくなったという状況もあるかもしれません。昔は、皆ガキ大将グループやなんかでけんかしたりいじめられたり、そういうことで鍛えられていることもあってか、いじめられている子どもにはそれならお前こうすりゃいいじゃないかとか、あるいはいじめている子どもには急所をつかんだような指導ができたんですけども、そういう先生もいなくなりましたね。

だから、ある意味では、今はいじめが教育の矛盾を露呈している。いじめ事件が起きる、あるいはいじめということが、学校で問題になっている時は、そういうことではないかなと。だから、我々がいじめを社会全体の問題として取り組んで、少なくとも陰湿で極端ないじめはなくさなければいけません。そういう意味で、僕はここ2～3年がいじめの、いじめをなくすための本当のスタートに立ったばかりではないのかなと考えています。そういう意味では、これからたくさん論議を重ねていく必要がある。そこから、新しいいじめの対策がきっと生まれるのではないかなと確信しています。そしてそのことに期待を込めて、絶対に成し遂げなければならないことだということを締め言葉にして、僕の今日の講演を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

*このトークショーの様子は、動画共有サイトYouTubeの「人権チャンネル」にて視聴可能です。

<https://www.youtube.com/jinkenchannel>

19 学校などに対して、言い掛かりとも自己中心的ともいえる理不尽な要求や苦情、文句、非難などを行う保護者を意味する和製英語。日本では、1990年代後半から増え始めたといわれており、深刻な社会問題となっている。担任の教師に対して行われる場合が多いが、学校長や教育委員会などのより権限のあるところにクレームを持ち込み、教員に対して間接的な圧力を掛けるといった事例も増えている。略して「モンベ」とも呼称される。なお、当該の要求が常識の範囲内にあり、かつ然るべき理由を明示してくる場合は「モンスターペアレント」とは呼称されない。

●関連情報

*直木賞 絵本 児童書 作家/志茂田景樹のWEB絵本・読み聞かせ劇場

<http://www.kageki.jp/>

*絵本・読み聞かせ 講演 全国 旅日記 No.322

http://www.kageki.jp/tabi_nikki/322.html

*志茂田景樹のふだん着ブログ

<http://plaza.rakuten.co.jp/odata325juk/diary/>

*志茂田景樹 ツイッター

<https://twitter.com/kagekineko>